

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2020 年 9 月 1 日 発行
(通巻 486 号)

現代座レポート No. 83

- ・『風は故郷へ』 コロナが教えてくれたこと (1)
- ・コロナに耐えられる劇場へ・緑町ふれあいサロン (2)
- ・ヨガ教室・朗読教室・岡田京子さんの歌の会 (3)
- ・木村快ノート「われらはずこより来たる」③ (4-5)
- ・ありあんさ通信No. 31 わが友マサカツ (6-7)
- ・劇団 1980 来訪 会館日誌 会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

『風は故郷へ』 「コロナが教えてくれたこと」

今年はずいぶりに本格的な芝居をやろうと、9月に『風は故郷へ』を上演する計画でした。

◆木村快が1980年代の北海道取材しながら、『少数派の歌』というテーマで創作した作品です。国鉄がJRになり、次々と奥地の鉄道が廃線になっていきます。外地からの引揚者が開墾した開拓地は廃村に追い込まれます。この作品は1988年から1991年にかけて全国151自治体で157回公演しました。

◆少年時代は満蒙開拓青少年義勇軍として満州に送られ、敗戦と同時にシベリアに抑留され、やっと生き延びて帰国すると働く場所がなく、緊急戦後開拓法で荒地を開墾し、必死に子どもを育てたと思ったら、今度は農業構造改善事業で食糧の生産より車や家電製品を輸出し、「国民」をもつ

【少数派の歌】

大の虫が生きているために
小の虫が踏みつぶされる
小さな虫が
人間であるための
新しい歌が欲しい
新しい歌を運ぶ
風が欲しい



と豊かにするのだという時代になります。開拓地は整理され、老人たちは離農を迫られます。

◆「俺たち国民じゃねえのか」「いや国民さ。少数派のな。」
◆老人たちはシベリア抑留の過酷な労働で耐えられなくなったとき、みんなで一緒に歌をうたいながら生き延びたことを思い出します。荒地の開墾でも自然と対話しながらみんなで生きる道を探しました。生きてさえいりやなんとなる。そんな老人たちの姿は何か楽しげでした。最初は都会へ出るつもりで老人を手伝っていた若者たちも、一緒に働きたいと思いはじめます。貧しいけれど一緒に働く協同の誕生です。

◆あれから40年たった現在、今では少数派だけではなく、人類全体がコロナ・パンデミックに怯えています。コロナ騒動は簡単にはおさまらないでしょう。おさまっても、もう金さえ積めば豊かで便利な社会に立ち戻れるとも思えません。

◆現代座も今すぐ公演は出来ないけれど、いい機会だから、じっくり稽古して作品の世界を深め、時代を振り返ってみよう。あの老人たちのようにコロナを含めた自然と対話をはじめてみよう。そんなことを話しながら稽古を開始しました。

稽古場の窓は開け放し、マスクをしながらの稽古です。来年秋に公演予定です。

コロナに耐えられる劇場へ 現在奮闘中

現代座会館には地下のホールと3階の小ホール、そして2階にはサロン風会議室と視聴覚室がありますが、3月にコロナウイルスの感染が広がってからはほとんどの活動を停止しています。特に地下ホールは全く使用しない状態が5ヶ月以上続いています。

◆現代座地下ホールの現状

現代座の地下ホールは劇団員が100名前後働いていた統一劇場時代に建設したものです。舞台設備は公会堂・中ホール並の機能をひと通り揃えています。巾13メートル、奥行き12メートル、高さ6.5メートルの大空間であり、さらに地下2階には俳優がメイキャップや着替えをする楽屋があります。



【写真右】 中2階操作室を整備

木下美智子、西河大。

【写真下】 イレクターを使っての作業、白井雅紀と八木澤賢。



1998年に職業劇団を解散したとき、このホールを地域のために役立てようとNPO組織で活用することになりました。しかし、会館の整備はなかなか進まず、会員の西河大がボランティアとしてこつこつと点検・補修を続けていました。

◆コロナ不安の長期化に備えて

都内で劇場のコロナ感染が話題になったとき、ホールの使用を停止している間にコロナにも耐えられるよう、全面的に整備することにしました。照明と音響の操作盤のある中2階の機材整理は西河大、倉庫、楽屋の整備、カビ防止塗装、幕の整理等は会員の八木澤賢、白井雅紀が連日取り組んでいます。そのため高い場所の作業が容易なようにイレクター（仮設足場）も購入しました。

倉庫からは何十年も使用しないままの器具や、再演に備えて保存していた芝居のセットを運び出し、処分しました。広くなった倉庫の壁には防カビ剤を塗って棚を作り、機材を分類保存できるようにしました。

◆換気設備、除湿装置

湿気とカビ対策、コロナ対策に最も大切なことは換気システムの改良です。除湿装置を新調し、40年以上使い続けてきた換気装置は思い切って処分しました。

いつも現代座会館をチェックして下さっている地元の商店会長で、現代座会員でもある工務店経営の今井啓一郎さんをお願いして、新しい強力な換気システムと取り替える工事をすすめています。

◆緑町ふれあいサロン

2013年から毎月1回、地域のお年寄りが気楽に集まっておしゃべりするふれあいサロンを開いています。劇団員も参加し、20分前後の昔話、朗読などで楽しんで貰い、一緒にお茶を飲んでおしゃべります。しかし、今年の4月、5月はお休みしました。6月から再開しましたが、やはり年配者は感染を心配して参加者は少なく、「密にならなくて丁度いいね」と言っていたのですが、8月は大変な暑さにもかかわらず5人が参加してくれました。みんなマスクをしてなるべく離れて座りました。フェイスシールドを持って来た方もいます。久しぶりに会えて嬉しかったとスタッフ共々楽しいひとときを過ごしました。



◆ここでは写真撮影のため一時的に間隔を狭めています。

◆ヨガ教室

現代座の3階ではヨガ教室も開かれています。現代座の俳優志野さんが講師です。初心者クラス、中級者クラス、女性のための〈姿勢改善骨盤ヨガ〉、シニアのための椅子を使つての〈整形外科ヨガ〉と、火曜と木曜にいくつもの教室をやっています。

4月・5月の緊急事態宣言の間も「どうしても体を動かしたい」という声に応え、限定2名。完全予約制で続けて来ました。

宣言が解除されると、それまで我慢していたシニアの参加者が「やっぱり身体を動かさないと不安だ」と増えて「密」になってしまいました。そこでシニアのクラスを二つに分けて、最大5名でやっています。ヨガで体調を整えて免疫を高めようと、みんな元気です。



シニアクラスの様子

◆誰でもできる朗読教室

第9期の朗読教室は4月開講の予定でしたが、コロナのために延期し、6月から始まりました。水曜の昼7人、夜5人、木曜の夜6人の3クラスです。

しかし朗読は声を出さなければできませんし、発声練習もしますから、講師の長谷川さんはとても悩んでいました。手洗い、消毒、換気は勿論のこと、長机をやめて一人用の小さな机を用意し、できるだけ離れて座りました。受講生も色々なマスクを使ったリマウスシールドも使って工夫をこらします。

夜の教室では空けた窓から虫が飛び込んでくることもあり、急遽網戸をつけることになりました。大変な中ですが、お客さんは呼ばなくても、ちゃんとステージでの発表会はやろうということになり、11月の発表に向けて受講生は頑張っています。



◆岡田京子さんの歌の会

現代座会員で朗読教室の受講生でもある今井治江さんから「3人なだけで現代座では歌うことはできるかしら」と電話があつたのは4月でした。

6月からは月2回、岡田京子さんの指導で歌う会を始めました。今井さんはコロナで仕事がなくなつた岡田さんが心配で、岡田さんの家の近くで歌える場所を探したのですが、歌つてもいい公共の場所が見つかりませんでした。現代座は岡田さんの家からは遠いけど、通い慣れた場所です。窓を開いて風通しをよくし、3階小ホールを使つてもらっています。

今井さんは「岡田さんの音楽が大好きだから、シャワーのように浴びたいよ」と言う笹本英彰さんと組んで、〈永井和子作詞・岡田京子作曲〉集のコンサートを開きたいと夢を広げています。

88歳の岡田さんは元気に現代座に通っています。



笹本英彰さん 今井治江さん 岡田京子さん

木村快ノート◆われらいずこより来たる③◆ 新劇運動との決別「庶民の新劇」

◆時代文化の激変期

前号②で述べたとおり、敗戦後はGHQ（進駐軍最高司令部）支配のもとで数年間、復員兵や300万人以上の海外植民地からの引揚者で失業者があふれていた。価値観は「天皇陛下万歳」から「民主主義万歳」に大転換。日本社会はどこへ向かうのか定かではなかった。さらに国際的には中華人民共和国の成立、朝鮮戦争の勃発。そんな1950年に新協劇団と中央芸術劇場の思想的分裂、ヴェリテ・せるくる誕生、そして1951年の新制作座スタートとなる。

◆大衆とは何か、新劇界との決別

新劇運動は国民のための演劇を創造する運動であったから、「大衆のため」という言葉はよく使われていた。しかし、当時普及しつつあったラジオの人気番組や低俗なドタバタ映画を好む大衆は低俗だと考えがちだった。そこで大衆に時代の真実を伝える作品を上演しなければならぬという問題意識が強かった。

3人の創立者、真山美保、草村公宣、榎村浩吉は繊維工場の慰安会や学校公演を続けながら、それまで全く想像したことのない劇場の反応を体験する。

新劇では静かに鑑賞することが通例であるチエーホフの『結婚申込』に、女性労働者たちは歓声を上げ、「良かったよーっ！ また来てねー！」と声をかけてくる。真山や草村はこのひとびとを低俗と呼んでいいのかという疑問を抱くようになる。

「劇場」で味わう感動はその都度、集団的に体験して

みなければわからない。日本の新劇運動は舞台を通じて優れた芸術を大衆に「認識させる」ことに夢中で、体験の芸術を軽視していたということになる。

草村公宣は1959年のパンフレットに、このときのことを次のように述べている。「二月月の工場公演を通じて、私達の（大衆）は工場の劇場の中の観客である。大衆とは決して低いものではない。作品が本物である限り必ず理解される」。こうして新制作座は新劇界とはきっぱり決別することになった。

◆福田定良教授との出会い



【福田定良・1955年】

当時、大衆芸能の研究を進めていた法政大学の哲学教授・福田定良は、1952年度芸術祭で上演され、文部大臣賞を受賞した『泥かぶら』にある種の感銘を受けていた。きわめて単純な民話劇でありながら、観る者の心を解放する力を持つていたからである。しかし、新劇関係者の反応は実に冷たいものだった。

福田は戦時中、日本海軍の軍属として徴用され、インドネシア・ハルマヘラ島の飛行場建設に従事した経験がある。インドネシア人と共に働きながら、日本人の文化性についていろいろ考えさせられたという。川を下る船中で、インドネシア人が素朴な民謡を口ずさみ、次第に大合唱となったとき、日本人は逆に「愛国行進曲」を大合唱してそれをばんだという。

福田は復員後、法政大学教授となつてから、大衆芸能についての数々の著作を発表し、注目を浴びていた。

福田は独自の喜劇論を持っていた。ギリシア古典劇では高貴な人々を扱う「悲劇」に対して、生活者の心を解放させ、共にあることの喜びを実感させるのが「喜劇」であった。したがって悲劇の世界につかりきつた新劇を飛び出した新制作座には、本格的な喜劇を創造する力があるのではないかと期待していた。

◆時代は新劇に何を求めているのか

1954年12月の芸術祭に参加した真山美保の第3作『市川馬五郎一座てんまつ記』は福田の働きかけもあつて、演劇畑以外の作家、知識人、青年労働者が多く観劇し、圧倒的な支持を受けてネットワークが広がった。

とかく作品内容の進歩性だけを問題にする新劇人に対して、評論家の鶴見俊輔は「国民の現状は当然馬五郎一座のような保守性を持っている。だがこの作品には進歩的な人々と保守的な人々の対話を通して、新しい視点を開かせている。現代が求めているのは対話である」と評価している。

以後、真山、草村、榎村は福田定良と相談しながら時代の転換を見据え、新しい劇団建設の方向を探ることになる。

◆劇団とは何か

劇団とはなんとなく俳優の集団と考えられていたが、全国を巡演する劇場で生きる新制作座にとっては、単なる俳優集団であるわけにはいかなかった。

巡演を職業とし、安定した活動を続けるため、思い切つて全員給与制にして、集団全員で必要な仕事を分担する。小さな公演でもみんなで観客を送り出し、又

タツフも俳優も集まってその日の舞台を点検し、明日の劇場への改良を目指す。こうした姿勢が一般大衆の間でも好感を持たれ、公演の要望も増えていった。

全員が俳優兼スタツフだから、新人でも現場で照明器具の扱いや大道具の組立技術を蓄積し、舞台経験を積むことができる。幕が開くとみんな舞台上に立つから、アンサンブルのしっかりした大型の舞台となる。

◆本格的職業劇団の確立

1956年4月、新制作座は西武池袋線・井荻駅から歩いて3分の場所に敷地180坪を購入。建坪120坪2階建ての本部稽古場と大道具制作場を建設。さらにこの年、「大衆の中で、大衆と共に、私達は演劇を創る」の主張を掲げ、『庶民の新劇・新制作座』というB5判36頁の小冊子を発行している。これは演劇人、劇評家、作家に「国民演劇のあり方」について率直な意見を求める呼びかけだった。福田定良は「国民演劇の胎動」と題する本格的な論文を掲載。今や時代は転換し、勤労者、農民、地域生活者を対象とした文化の時代であると主張している。鶴見俊輔も「演劇におけ



新制作座本部稽古場

る反動・保守・進歩・進急」と題して意見を発表。ジャーナリズムの間でも一定の評価が出るようになった。

◆鉱山地帯に生活する人々の歓声

1958年、新制作座は『野盗、風の中を走る』の巡演を開始する。新劇としては珍しい5幕6場に及ぶ時代劇である。対象として定めたのは北海道、九州に散在する炭鉱の街で、正確な上演回数は記録されていないが北海道、九州の炭鉱地帯をくまなく巡演しているから700回近く上演されているはずである。

炭鉱の街はどこも人里離れた地域に孤立している。会社の提供する娯楽は映画や三流歌手の実演くらいだったから労働者もその家族も文化的に恵まれない人々だった。しかし会場は大集会に使用するため劇場設備がしっかりとっていて、本格的な舞台照明で浮かび上がる『野盗、風の中を走る』の大舞台は人々を驚喜させた。炭鉱は勤務が三交代であるため、どんな小さな街でも昼夜2回の上演を行い、家族総出で街をあげての観劇となる。この巡演によって直山、草村、楨村以外の若手劇団員も大きく力をつけ、以後、全国炭鉱労働組合との文化的提携がはじまる。

◆劇評：七人の「人間性」に興味【朝日新聞】

(1958年劇団パンフレットより)

戦国乱世の時代、向坂七人組を名乗る野盗が主人公。豪族の館に押入って多くの財宝を得た彼らは、一時の平和を求めてある荒れ寺に泊る。住職は彼等を、かつてこの地に善政を施した尼崎家の一門と思ひこむ。やむなくわか武士にされた彼らは一日も早く逃げ出すとすると、窮乏にあえぐ農民たちの姿を知り、力を

合わせて非道な領主を倒す戦いを起す。戦いは功を奏し、農民たちに夜明けが訪れ始めた時、彼ら七人は尊い犠牲となつて死んでいく。

初めは本意でなかったにもかかわらず、結局は農民と結びついて村の解放的な役割を果す野盗七人の姿が、明るいユーモアをまじえて展開される。映画的手法を用いたプロローグから、彼らが死んでいく終幕までツボを心得た作劇術であり、「人間性」を深く掘りさげたところにこの作品の持つ「意義」と面白さがある。

楨村浩吉、草村公宣ら七人組を演ずる演技陣も、それぞれに憎めない性格を出し、その他も自由にのびのびした舞台をふんでいる。(輝)

■筆者(木村)が新制作座と関わるようになったのは1958年9月、東京よみうりホールで上演された『野盗、風の中を走る』を観劇したことからだ。次号からは新制作座に参加した自分の体験をまとめてみたい。



『野盗、風の中を走る』

ありあんさ通信 No. 31

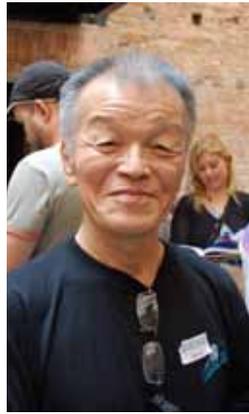
歴史から消されたアリアンサ（協同）の地、ここにあり

わが友、マサカツのこと

木村 快

2020年5月28日、ブラジル・サンパウロ州ミランドポリス市アリアンサ地区のユバ農場で暮らしていた「マサカツ」こと矢崎正勝が天国へ旅立ったとの知らせを受けた。享年76歳。

1978年以来続けてきたぼくの「ブラジル移民史」調査は、ほとんどマサカツが資料を集め、助言してくれたものである。マサカツのことを紹介しておきたい。



矢崎 正勝
やざき まさかつ

マサカツは1943年、戦前の日本の植民地台湾の台北市生まれ、敗戦後は東京都小金井で少年時代を送っているが、19歳の時アリアンサ・ユバ農場に渡っている。

ユバ農場は戦前から共生協同を原則とし、「折り・耕し、芸術する」農場として知られていた。当初、マサカツは作業に加わらずギターばかり弾いていたらしいが、次第に芸術部門を担当するようになった。

◆「日本人ブラジル移民史」の謎

1994年、ぼくが療養のためユバ農場に滞在したとき、日系二世に伝える移民の歴史をまとめたのだが、なんとか日本側の資料を手に入れることは出来ないだろう

かと相談されたことがある。日本政府が移民資料をすべて廃棄したため、自分たちの出自を知ることが出来ない。日系社会の公的移民史とされる『日本人ブラジル移民八十年史』（1990年日伯文化協会編）ではこの現存する最大の移住地（アリアンサ）のことさえほとんど省略されている。

「じゃあ誰か研究者を探してみよう」と日本に帰ってみると、日本の歴史学では移民史、植民地史は扱わないことになっていて、戦前、ブラジル、満州、朝鮮などに数百万の人々を送り出しているながら、専門の研究機関はなく、ブラジル移民については移民学会やブラジル移民資料館でも戦前の移民資料は扱っていないとのこと。（2003年、木村確認）

そんなことも知らず、現代座は1994年にブラジル日本通商条約100周年記念行事として日系諸団体から招聘を受け、戦後移民を扱った現代座の作品「もくれんのうた」をブラジル全土13都市で記念公演していた。実に恥ずかしいことである。

◆アリアンサはなぜ移民史から消されたのか

日本人のブラジル移住はサンパウロ州政府による農場労働者募集で1908年から始まった。移民会社の宣伝にだまされ、帰国できないまま住み着いた日本人移住地がたくさん生まれ、それが世界最大の日系社会を形成する土台となった。だが移住者は移住地を捨てて都市へ集中し、集落跡もほとんど消滅している。現在残るのは、日本文化を継承するユバ農場があるミランド・ポリス市アリアンサ地区だけである。

アリアンサは出稼ぎ移民ではなく、1923（大正12）年、「理想の村」をめざして協同組合方式で建設された大移住地で、最盛期には人口4万人を超える大農業地帯だった。日本国内では大正8年ころから大正デモクラシーの影響で「協同の生き方」を志向する青年

たちが増えていた。貧しい若者を支援する（日本力行会の永田桐らはブラジルにおける出稼ぎ労働者の悲惨な実態を知り、長野県の協力を受け、移民会社に頼らず独自に協同組合方式の移住地を建設しよう）と、日本全国から協同組合員を募集し、その出資金でサンパウロ州奥地に協同組合方式のアリアンサ移住地を開設。日本力行会の青年たちが無償で開設に従事している。

アリアンサとはブラジル語で協力・協同を意味する。ブラジル市民との共生を理念とし、日本語の標記も「植民地」でなく「移住地」を使った。そのため、戦前ブラジル地図に記載された唯一の日本人移住地でもある。だが、昭和2年以後急速に右傾化する日本政府内務省の干渉によって、政府からの保護支援が断ち切られている。そして移民会社中心の日系社会では異端の移住地とされ、孤立しながら生き続けた歴史を持つ。

◆闇に埋もれた〈国策移民の経過〉を明らかに

ぼくとマサカツは1995年にアリアンサ史研究会を組織し、移民史に関心を持つ人々の協力を受けながら埋没資料を発掘し、2004年には日本の外交史料館で戦前の国会審議事録を調べ、全体像を確認するところまで来た。その経過を簡単に紹介する。

実は昭和2年からの国策移民は、田中義一内閣の移住組合連合会専務理事に就任した梅谷光貞が、アリアンサ開設責任者だった輪湖俊午郎の協力を受け、「チ工テ」、「バストス」、「ヘトレス・バーラス」、「アリアンサ」

の四大移住地を開設して、その後の日系社会の土台となっている。

ところが昭和6年に梅谷光貞が政府の無謀な指令を納得しなかったため、平生夙三郎内相



に解任され、国策移民記録はすべて削除、アリアンサ移住地についての記述も移住史から消し去られていた。これをどういう形でまとめるかという段階で、当時ユバに滞在していた言語学研究者の渡辺伸勝から「当然、全アリアンサの歴史が知りたい」との提言が出る。実はアリアンサ3地区も戦前、政府の干渉で分裂したままで、お互いに全体の歴史は判らなかつた。

マサカツはすぐアリアンサ第1、第2、第3地区の有志に呼びかけ、〈全アリアンサ史〉の編集委員会を設立する。すでに2世が多数を占める時代であり、日本人よりブラジル人を対象にして編纂することになり、3年がかりで完成。日本語版とポルトガル語版が発行された。

こうして『創設八十年』は単なるアリアンサ地域史ではなく、日系社会ではじめての日本人移民史全体の根幹を示す文献となった。

『共生の大地・アリアンサ』（木村快著、同時代社2013年）はこうした蓄積をもとに執筆できた。

◆NGO・コムニダーデ・ユバ

アリアンサは中産階級の出身者が多かったから農業生産力は脆弱だった。そこで日本力行会はアリアンサに南米農業練習所を開設して多くの青年を送り込み、移住地ではその出身者を小作人として雇用し、文化活動を保証した。小作人による野球チームは全ブラジルで3度も優勝している。俳句・和歌・文芸も盛んだった。アリアンサの句会は現在も継承されている。

青年たちは野球チームによる遠征でブラジル各地の移住地の現状を知り、ブラジルに適した農業生産の研究に励み、養鶏産業を起こし、移住者たちを助けた。

野球チームからはじまったユバ農場は現在、NGO（非政府公益団体）コムニダーデ・ユバの名称でアリアンサ地域の文化センター的存在となっている。

◆ブラジル連邦政府文化功労賞受賞
アリアンサ・ユバ農場の〈農民バレエ団〉は1950年代から全ブラジルに知られている。2008年にはブラジル連邦政府から長年のブラジル国民に対する文化的貢献が評価され、NGOコムニダーデ・ユバに〈ブラジル連邦政府文化功労賞〉が贈られている。



★マサカツの指揮で演奏するアリアンサ弦楽合奏団

◆北原・輪湖記念館
1994年当時、ジャングルの中でアリアンサ開設責任者だった輪湖俊午郎や北原地価造の旧宅が廃墟になっていた。歴史を継承するためにこれを移築、改装して〈移住記念館〉にしようということになった。

さっそくマサカツが移築作業計画を作成した。九月に及ぶ解体移築作業は農場員が行い、工費、材料費は全ブラジルの協賛者からの寄付が集められた。「北原・輪湖記念館」と命名され、応接間、来客宿泊室、研究室、会議室、移住関係資料室が開設され、維持管理はユバ農場が引き受けている。



◆北原地価造邸は骨格しか残っておらず、輪湖俊午郎邸は使える材料が多かった。骨格は北原地価造邸を使用し、室内部分は輪湖俊午郎邸の材料を使用。
◆広場の周囲は戦後ユバ農場に移住したブラジルでも著名な彫刻家として知られる小原久雄の作品が並んでいる。

これを機にユバ農場はブラジル政府から〈ポントス・デ・クルトゥーラ〉（地域文化拠点）の指定を受け、周辺地域の子どもたちのための弦楽器指導を行い、〈アリアンサ弦楽合奏団〉が誕生している。これは大都市での話ではなく、サンパウロ市から遠く600キロも離れた農村地帯でのことであり、多くのブラジル人の関心を集めている

毎年ユバのクリスマスでは日本語演劇の上演と同時に、弦楽合奏が行われ、近郊の街だけでなく、サンパウロ市からも多くの観客がやってくる。

ブラジルは世界各国からの移住者で構成されている国であるため、それぞれの母国文化の特徴をしのばせる歴史的文化的財が残っているが、日本人移住者の場合はほとんどの移住地が消滅したこともあり、ほとんど残っていない。日本式の木造建築は維持保存が困難なこともあり、この記念館の実現は非常に貴重である。

◆共生協同を生きた男

マサカツはアリアンサの文化伝統を背負った男だった。世界が「コナウシルスで揺れる現代だからこそへ共生協同」に生きた男として紹介しておきたかった。農場の近況は、またあらためて紹介したいと思う。

◆楠野裕司氏と〈劇団1980〉来訪

ブラジルからやってきた楠野ユージさんから「コロナで飛行機が飛ばず、ブラジルへ帰れないので、友人と一緒に訪ねたい」と電話がありました。ユージ夫妻には1997年のアマゾン地帯の移住地調査でも大変お世話になっていました。ユージさんと一緒にやってきたのは〈劇団1980〉の柴田義之さんたちでした。

〈劇団1980〉は現代座が1994年にブラジルに招かれて公演をした後、2回もブラジル公演をしている劇団です。柴田さんはブラジルが大好きになり、また来年も移住を扱った芝居を創ろうと準備を始めているそうです。その話を聞いたユージさんが、柴田さん、作家の高橋正徳さん、スタッフの瀬戸口郁さんをブラジル移住の資料を確認するため案内してきました。いい芝居が出来るように出来るだけの協力をしていきたいと思います。



後列（左から）楠野ユージさん、スタッフの瀬戸口郁さん、作家の高橋正徳さん
前列（左から）柴田義之さん、木村快

現代座会館 6月～8月 活動日誌

6月12日 「レポート82号」 発送作業

21日 緑町第2町会総会

7月20日 楠野氏と劇団1980来訪

8月22日 緑町第2町会役員会

31日 「市民運動新聞」取材に来訪

「平右衛門研究会」事務局会議

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

〔現代座ホール〕

8月17日 杉山「りんどうの会」稽古

18～21日 劇団トマト座稽古

〔三階小ホール〕

6月14日 現代座「風は故郷へ」稽古

7月5日 現代座「風は故郷へ」稽古

19日 木の下放送劇録音

8月9日 現代座「風は故郷へ」稽古

22日 木の下放送劇録音

月2回 今井「岡田京子歌の講座」

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

〔定期使用 一階サロン〕

毎水曜日 熟年パソコンサークル

隔木曜日 JGD 熟年講座

◆前号（82号）の訂正とお詫び

・2頁「財政状況」の「2019年度は200,0238円の赤字でした」は誤りで、正しくは「200,238円」でした。

・4頁中段「JGD」は誤りで、「JGD」は「JGD」の誤りでした。お詫びします。

（木下美智子）

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
協賛会員 10,000円（1口以上）
郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座